

井上靖

夏草冬濤

夏草冬濤

井上靖

新潮社版

夏草冬濤

〈井上靖小説全集26〉



昭和48年5月20日発行

昭和53年10月30日4刷

定価 1100 円

© Yasushi Inoue, 1973,
Printed in Japan.

著者 井上靖

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一
電話・業務部(〇三)二六六一
五一一一、編集部(〇三)二六
六一五四一 郵便番号・一
六二 振替・東京四一八〇八

印刷所 二光印刷株式会社
製本所 株式会社大進堂

乱丁・落丁本は、御面倒で
すが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担に
てお取替いたします。

目次

夏草冬濤

自作解題

五

四
九

装
画
加
山
又
造

井上靖小説全集
第26卷

夏草冬濤

一章

七月二十日から夏期休暇にはいったが、その日から十日間、静浦で泳ぎのできない低学年の生徒のために、水泳の講習会が開かれた。三年生の洪作はそれにはいった。洪作は小学生時代を郷里の伊豆の山村で送っていて、夏は毎日のように川にはいつていたので、川なら、どんな急流でもそれに体を投げ込むことができたが、海となると、からきし意気地がなかった。

溪流の石と石との間を、流れの力を借りて、下流へと体を流して行くことを、村の子供たちはナンガレと呼んでいたが、その名の如く泳ぐのではなくて流れるのである。洪作もナンガレはできたが、海においてのまともな泳ぎはできなかった。

洪作は一年生の間を浜松中学で送り、二年の初めに沼津中学へ転校して来たので、沼津中学における夏休みは、こんどが二度めであった。浜松中学の一年の夏は学校から浜名湖の水泳場に通わされたが二、三日通っただけで、腹痛を起し、それをしおに水泳の講習を受けるのをやめてしまい、去年の夏は沼津中学へ転校したばかりで友達もできていなかったで、水泳を習う気持にはなれなかった。従って、本格的な水泳の講習を受けるのは、こんどが初めてであると言つてよかった。

洪作が浜松中学から沼津中学へ転校したのは、軍医だった父が、浜松の連隊から台北の師団へ転任することになり、母や弟妹は父と一緒に台北へ行ったが、洪作だけは同じ静岡県でも郷里に近い沼津の中学へと転校し、三島の伯母の家からそこへ通うことになったのであった。洪作も家族の者と一緒に台北へ行き、その中学へ転じてもいいわけだったが、父には台北へ赴任しても、また幾許もなくして他へ転じかねないという懸念があったらしく、そんなことから、洪作を沼津中学へ転じさせ、そこに落ちつかせる方針をとったのであった。

洪作は父の姉に当る伯母の家から沼津中学へ通った。三島と沼津の間には電車もあり、電車で通学する者もあれば、自転車を通う者もあった。ごく少数の者だけが三島、沼津

間の五キロの道を徒歩で通った。洪作はその徒歩組の一人であった。当時自転車は高価なものとされており、商売でも管んでいる家は別にして、普通の家ではなかなか通学の目的だけで子供に自転車を買ってもらえることはなかった。

洪作は同級生の二人が徒歩で通っていたので、その二人に付合うようになつても、毎朝のように誘ひ合せて、松並木がところどころに残っている街道を歩いた。ある時は駆け、ある時は道端に腰を降ろしたりして、毎朝のように遊び遊び歩いた。歩いて行くと、途中の部落から生徒が加わって来たりして、徒歩組には徒歩組の楽しさがあつた。

静浦の水泳の講習会へ通う時も、洪作は毎朝沼津まで歩き、沼津の街の中心部からバスで静浦へ向つた。静浦の海岸は御用邸があるくらいで、波のおだやかな、危険のないいい海水浴場だった。

洪作は静浦でバスを降り、中学の水泳場のある浜の方へ歩いて行く時が、一番楽しかった。他校の生徒がはいれないように、水泳場には区切りがしてあって、そこに白い旗が何本も海風にはためいていた。他校の水泳場も、少しの間隔をあけて幾つか設けられてあり、それぞれが旗を立てて、自分たちの水泳場の区域を示していた。白い旗もあれば、赤い旗もあり、時には青い旗もあった。そしてそれぞれの区域の中に、少年や少女たちが、色紙のかけらでも振

り撒いたような賑やかさで散らばっていた。叫び声や喚声は絶えず起っていたが、それらは波の音で消されていた。どの水泳場も一つか二つの飛込台を持っており、いつそこへ目をやっても、夥しい数の河童たちがそこにたかっていた。

洪作はその水泳場へ行つて、出席簿に名前を書き込むと、自分の配されている組を探してそこへはいって行った。

洪作はナンガレができるくらいだから、潮の中へ体を浮かすことはできた。泳ぎもすぐ覚えることができた。ただ深いところへ行くことはできなかった。体も浮くし、多少の泳ぎもできるので、指導に当たっている上級生の命令通り、飛込台の設けられてあるところまでは、普通の少年なら、なんでもなく行くことができる筈だったが、洪作はそれがだめだった。ここは大海の一部であり、底知れぬ深さを持った海につながっているのだと思うと、ふいに恐怖心が彼を襲った。

「もう、おまえは大丈夫だ。二十メートルや三十メートルはらくに泳げる筈だ」

上級生は言ったが、洪作は飛込台のところまで行くことなど思いもよらなかった。いつも後込みした。そうした洪作に気付くと、上級生はそんな洪作が理解に苦しむらしく、「なぜ行かないんだ」

と怖い顔をした。

「怖いもん」

洪作が言うのと、

「怖い!? 情けないことを言うな。なぜ怖い」

「もしもものがあつたら」

「もしももくそもあるか、この野郎!」

洪作は頭から潮の中に突込まれたが、そんなことは何でもなかった。頭を水の中へ入れるぐらいのことはナンガラで毎日やっていた。

陸からそう遠く離れない限りに於ては、洪作は潮の中に体をつけていることは楽しかった。ただ急に脚でも引きつってしまった場合、すぐ引き返すことのできぬような遠い沖に浮かんでいるということは不安だった。

こうした洪作のことは、すぐ上級生の間では問題になつたらしく、ある日五年生の一人がやって来て、

「おめえか、深いところへ行けねえという奴は」

と、言った。陽やけしたまっ黒い顔の中で眼だけ光っている。

洪作は飛込台のところまで泳ぐように命じられた。相手の形相が凄かったので、両手と両足をやたらにばたつかせて必死に飛込台の方へ近付こうとした。十回ほど手足をばたかせているうちに、背の届かぬ深いところへ来たと思

うと、いきなり大きな不安が洪作をわし掴みにした。もうだめだと思った。そしてすぐ方向転換して、あととはめちやくちやに手足をばたかせた。

「この野郎!」

そんな声と一緒に、洪作は自分の頭が上級生の手で潮の中に突込まれるのを感じた。漸くにして海面に頭を出すと、また突込まれた。そんなことを二、三回して、海水を飲まれた。三、四人の五年生がやって来た。洪作はボートに乗せられて、飛込台のところへ連れて行かれ、その近くで潮の中へ投げ込まれた。洪作はすぐ飛込台の足の一本にしがみついた。そして、潮の中に居る限りこの上どんなことをされるか判らないと思ったので、飛込台の上に這い上がった。

五年生の一人が飛込台の上へ上がって来た。ボートは他の五年生たちに依つて、浜の方へ戻されて行つた。飛込台に上がって来たのは岡という生徒だった。

「ここから飛び込みな」

岡は言った。その口調は静かだったが、ひどく残酷なものを持っていた。

「ここから飛び込む?」

洪作は海面を見降ろした。陸から見ると、飛込台はそれ程の高さには見えなかったが、いざその上に上がってみる

と、潮の面までは相当の距離があった。飛込台のところまで泳いで来られないくらいであるから、ましてその上から飛び込むというようなことは思いもよらないことだった。

「さあ、飛び込め」

岡はねめつけるようにしていたが、

「飛び込まないと、突き落すぞ」

「本当に、俺は、泳げないんだ」

「何を言っているやあがる。三年にもなって泳げない奴があるか。泳げないなら、泳げるようにしてやらあ」

岡が一步体を近付けて来たので、洪作はあたりを見廻した。しがみつくものはどこにもなかった。

「俺、自分で飛び込む」

洪作は言った。突き落されるより、自分で飛び込む方がいいと思った。しかし、飛び込めるという自信はなかった。一分でも時を稼ぐつもりで、洪作は飛込台の上に体をまっすぐに立てた。

自分が立ち到っている困難とは無関係に、浜は強い夏の陽に輝き、そこに無数の小さい裸体が散らばっていた。海から上がっている時間なので、海中には一人の河童かわづむすこの姿もなく、みんな浜にむらがっていた。

「さあ、早く飛び込め！」

岡は催促した。飛び込めと言われても、そう簡単に飛び

込めるわけのものではなかった。上から見降ろすと、飛込台の脚に波がぶつかっては碎けている。飛込台はすっかり青黒い波に取り巻かれている。浜の方から見ると、海は青く美しく見えるが、上から見る限りに於ては、海面はいやにでこぼこして、青黒く、不機嫌である。

「早く飛び込め！」

その声で浜の方を見ると、浜が急に遠くなって見えた。海水浴場も遠く小さくなっており、そこに散らばっている無数の河童たちの姿も豆粒のように小さくなっている。海水浴場から少し離れたところに、こぼれ落ちそうなほど民家を満載した切岸が続いているが、その切岸もまた遠く小さくなっている。

もうだめだと洪作こうざくは思った。ここからあんな遠い岸まで泳いで行ける筈のものではない。途中で溺れてしまうにきまっている。大体こんな高いところから飛び込んだら、際限なく海の底へ落ちて行くだろう。何か適当な操作をしなければ海面には浮かび上がって来ないだろう。ところが自分はそのような操作は何も知らないのだ。操作を知らない以上、どこまでも沈んで行くだろう。再び海面へ浮かび上がって来ることなど望めないのだ。洪作は飛込台の上に坐った。

「俺、だめ」

洪作は言った。

「なんだと!？」

岡の顔は醜くゆがんだ。

「立て!」

「俺、だめ」

「女の腐ったような奴だな。怖いのか」

「死ぬのは厭だ」

「大袈裟なこと言やあがる。死ぬか、死なないか驗してやらあ」

岡の腕が伸びて来た。

「うわあっ!」

「何を言ってるやあがる!」

「うわあっ!」

どこにもつかまるところはなかった。坐ったまま飛込台の端まで引きずられて行った。絶体絶命だった。死ぬんなら自分で死ぬうと洪作は思った。

「自分で飛び込む」

洪作は岡の手を払って立ち上がった。そしてもう一度下をのぞいた。海面まではさっきよりまた遠くなっている。

洪作は再び坐り込んだ。岡が襲いかかって来た。もみ合っているうちに洪作は中腰になった。その洪作の背を岡の手が突いた。洪作の体は飛込台から離れた。

洪作は自分の体が、雑巾でも落ちて行くように、ひどく

みじめな固まりとなって落下して行くのを感じた。何か大きな叫び声を口から出したと思うが、あとは夢中だった。

小さい三角波がぶさぶさとぶつかり合っている紺青の海面が、あっという間に近付いたと思うと、洪作はその中に自分の体突きささるのを感じた。

腹部に烈しい痛みを覚えた。それと一緒に潮の中へ沈んで行ったが、すぐまたそこから弾き返された。ひょっこりと首が海面に出た。何も見えなかった。首を出した周囲は波ばかりだった。

うわあっ! 洪作は手をばたばたさせた。溺れると思った。が、すぐ本能的に足だけを動かす立ち泳ぎの姿勢をとった。体は浮いていた。首を海面に出したひどく頼りない格好だが、体が浮いていることだけは確かだった。飛込台から飛び込んだ筈なのに、その飛込台はどこにも見えなかった。すると、自分を海の中へ突き落した岡の顔が、メートルとは離れていないすぐ近くの潮の中から浮かび上がって来た。

岡は口から海水を吐き出してから、

「岸まで泳いで行け。俺がついて行ってやる」

「俺、だめだ。——飛込台まで連れてって、溺れる」

洪作は必死だった。本当に溺れそうだった。

「ばか、櫓はおめえのうしろにあらあ」

その言葉で、洪作は夢中で体の向きを変えた。なるほど飛込台は一メートルと隔たっていないところにあった。洪作は、いきなり、その脚の一本に掴まった。やれ、やれと思つた。ここに掴まっている限りは、深い海底へ落ち込んで行く心配はなかった。

飛込台の裾^{すそ}にかじりついてから、恐怖感が改めて洪作をわし掴みにした。

「おい、泳いで行こう」

岡は言つた。冗談ではないと思つた。洪作は岡につかまらないうちにとつて、潮の中から体を抜くと、すぐ飛込台の裾の横木に足をかけた。恐ろしい試練を経たためか、手足が抜けるようにだるかつた。洪作はさっき岡に突き落された台の上に這^はい上がった。

洪作は岡がみごとに抜き手を切つて浜の方へ泳いで行くのを見た。岡は見る見るうちに浜に近付いて行き、やがて岡の小さくなった体が浜の上にばら撒かれてゐる河童の群れの中にはいつて行くのが見えた。

岡が居なくなつたことで、洪作はほつとした。もう突き落されることも、泳ぎを強制されることもなかった。ただ、これで総ての問題が片付いたわけではなかった。飛込台の上に一人だけ残されてしまつてゐる。洪作はまた海水浴場の方へ眼を遣つた。そこはさっきよりまた遠くなつて見え

た。この時、洪作はぽつんと額に冷たいものを感じた。

洪作は空を仰いだ。瞬間、また冷たいものを頬と額に感じた。空の半分は青く晴れ渡つていて、陽の光を海面に落しているが、頭の上の半分はすっかり黒い夕立雲に覆われている。

浜の方に眼をやると、水泳場には異変が起きていた。河童たちの尽くが立ち上がつてゐる。ついさっきまで砂浜に寝そべつたり、砂弄^{すなご}びなどしていた連中が、一人残らず立ち上がつて動き出している。渠に水でもかけられた蟻^{あり}の動きに似ている。無統制なあわただしい動きである。夕立が来るので引き上げようというのであろうか。

雨が落ち始めた。頬にも、額にも、肩にも、腕にも、雨滴の散弾が見舞い始めた。大粒の雨である。

——おい！

洪作は叫んだ。ありつたけの声を口から出したが、それが浜まで届くとは思われなかった。雨に叩かれて、海面は急に生き生きとした表情を持ち始め、雨の音か波の音か判らないが、何か騒然としたものがあたりに立ち込めようとしている。

——おい！

洪作は何回も叫んだ。雨の落ちるのは烈しくなりつゝあつた。完全な夕立である。大粒の雨が海面にも、飛込台に

も、洪作の体にも落ちてゐる。水泳場の一角から、河童たちは逃れ出してゐた。水泳場を仕切っている旗も次々に片付けられて行く。

——おい！

洪作は、しかし、まだ誰かが救^{すく}つて来てくれるに違いないと思つてゐた。自分がここに居ることは岡が知つてゐる。岡以外にも何人かの五年生が知つてゐる筈である。

しかし、見る見るうちに水泳場から人間の姿は見えなくなつて行つた。最後に四、五人の河童たちが、ひとかたまりになつて駆け出して行くと、あとの浜はまるで違つたものになつた。もはや水泳場でも何でもなかった。人氣のない無気味な砂浜の端の方に、ボートが五、六艘置かれてゐるだけである。

——おい！

洪作はやたらに叫んでゐた。が、そのうちに雨煙りで、砂浜の方がかすんで来ると、洪作は叫ぶのをやめた。事態は、どうやら、とんでもない方に進んでゐるらしい。自分がここに残されていることは、誰にも気付かれなかつたのだ。あるいは気付いた者があつたかも知れないが、他校の生徒か村の子供とでも思つたのであろう。

洪作は、岡の残酷な顔を思い浮かべた。困らせてやろうと思つたのかも知れない。そうでなかつたら、岡もまた自

分をここに残して来たのを忘れたのだ。頭の悪そうな奴だから、忘れるということもあるかも知れない。

洪作は雨に叩かれたまま、両膝を両手でかかえて、飛込台の上にうづくまつてゐた。雨は烈しく落ちてゐたが、依然として遠くの空は明るく青かつたので、雨がそう長く降つていようとは思われなかつた。ただ体が冷たくなつて、ひどく寒かつた。

雨は短い時間烈しく降りしきると、急速に小降りになつて、それと一緒に陽の光まで射し始めた。陽の光の中で雨脚が銀色に光つてゐる。不安は薄紙をはぐように薄らいで行つたが、それにしても、飛込台の上に一人残されてゐる困難な状況は依然として變つてゐなかつた。

そのうちに水泳場の浜に三つの小さい人影が現われた。

洪作はそれに眼を当ててゐた。三人とも裸である。彼等は浜を横切つてボートの置いてあるところへ行くと、その一艘を押出し、次々にそれに飛び乗つた。

洪作はぼつとした。たれかが自分を連れに来てくれるのであろうと思つた。海面は夕立のために、見違えるほど生き生きとして波立つてゐた。ボートは体を大きく波に揺られながら、見る見るうちに近付いて来た。二人が漕いでおり、一人が突立っている。

——おい。

洪作は叫んだ。すると、ボートからも返事があった。

——おう。

突立っているのが、手を上げて叫んだ。

ボートは体を飛込台の脚につけると、一人の少年が飛込台の上にながって来た。少年は台の上に立つと、洪作の頭のとっぺんから爪先までしげしげと見たしてから、

「泳げないのか」

と訊いた。

「うん」

「岡の奴に、ここへ持って来られて、置いて行かれたのか」

「うん」

「ほう」

ひどく感心したように洪作の顔を見入っていたが、飛込台の下のボートの方に、

「若サマハ ココニイラシッタ」

と、そんなことを奇妙な口調で言った。すると、

「ドウレ デハ、オ救ケ申ソウカ」

そんな声が返って来た。間もなく、もう一人の少年が上がつて来た。これも洪作の顔を見守っていたが、この方は何とも言わず、

「ケッ、ケッ、ケッ」

と、猿の泣き声の真似をすると、いきなり飛込台の上で

体を跳躍させた。瞬間、少年の体はみごとなフォームで宙を切っていた。

一人が飛び込むと、もう一人も飛び込んだ。この方もみごとなフォームである。二人の少年たちは潮の中で、それぞれ思い思いの方角へクロールで泳いで行ったが、途中からまた飛込台の方へ引き返して来た。

ボートに残っていた他の一人の少年が、飛込台の上にながって来た。この少年の顔を見た時、洪作は自分より一年上の四年生だと思った。洪作はこの四年生の顔と名前を知っていた。金枝（きんえだ）という少年で、成績がいらいらしく級長をしており、朝礼の時、いつも歯切れのいいよく徹る声で号令をかけている。顔もあいの子ではないかと思うような目立つ顔をしている。色が白く、頭髮と眼の色が茶色というより金色に光っている。金枝もまた洪作を、頭のとっぺんから爪先まで見廻すようにしていたが、

「岡の奴に、ここに置いて行かれたんだって!? 災難だな」と言った。物を言う時、眼が笑っていて、それが優しい感じだった。

「泳げないのか、全然」

「少しは泳げる」

「どのくらい?」

「四メートルや五メートルは泳げる」

すると、

「四メートルや五メートル泳げれば、あとは幾らでも泳げるよ。泳げると思って泳げば泳げる。泳げないと思ったら、すぐだめになる。飛び込みだって同じだ。怖いと思ったら飛び込めやあしない。——それにしても、災難だったな」

金枝は笑った。

「飛び込みはさっきやった」

洪作が言うと、

「どこで？」

「ここで」

「じゃ、泳げるじゃないか」

「泳げないが、突き落されて、飛び込んだんだ」

「そして、どうした？」

「浮き上がって来たんで、すぐ櫓の足につかまった」

「ふーむ」

金枝は感心したように頷いた。そこへ、さっきの二人の少年が上がって来て、色のまっ黒な、見るからに敏捷そうな小柄な少年が言った。

「夕暮も迫ッテマイリマシタレバ、ソロソロ帰参イタストシテハ、イカガデゴザル」

すると、他の一人の、ずんぐりした体つきの、何となく不敵なものを顔に浮かべている少年が言った。

「デハ、若君ヲソロソロ、ボートニオ移シ申ソウカ」

それから、洪作に、

「漕げるか」

「うん」

「それなら、お前、漕いで行け。俺たちは泳いで行く」

寒いのか、ぶるぶると顔をふるわせていたが、やがて、ずんぐりした方は、ひとつ跳躍すると、いきなり頭を下にして、海面へ突きささって行った。

続いてもう一人の小柄な少年が飛込台を離れた。この方は、途中で体を一回転させて、その上で頭から潮の中へはいって行った。

「ボートへ乗って帰れよ」

金枝は洪作に言うと、彼もまた飛込台の上で二、三回跳躍し、それからこれもまたみごとなフォームで宙に体を浮かした。

洪作は三人の少年たちの海を何とも思っていない動作が、眩しく感じられた。きらきらしたものが飛込台の上にやって来ては、あっという間にそこから居なくなっている。

洪作は飛込台から下へ降りると、そこにあったボートに乗り移り、飛込台の脚にくくりつけてあった縄を解いた。

洪作はボートへ乗ったことはあったが、オールを手にすることは初めてであった。漕げるかどうか、自信は全くなか

ったが、三人の救援者たちに対して、ボートも漕げないとは言えなかった。

洪作は二本のオールを握った。ボートは波に乗って、高くなったり、低くなったりしている。オールは潮を捉えないうで、空を切ったり、潮の中に突きささって、そのまま動かなくなったりした。洪作はボートというものが、ひどく取り扱いにくい厄介なものだということを、この時知った。小柄の少年が抜き手を切って近付いて来ると、

「だめだな。俺が漕いでやる」

そう言って、ボートへ手をかけると、よいしょとかけ声をかけて、ボートへ乗り込んで来た。そのためボートはすんでのことで横倒しになるところだった。

洪作はすぐオールを少年の手に渡した。ボートは浜へ向って、波の上をすべり始めた。金枝ともう一人の少年は、浜へ向って競泳していた。二人が上げる二つの白い水しぶきが、波打際へ向って美しい線を描いている。

洪作は浜へ上がった。洪作のためにボートを漕いでくれた少年は、ボートを浜へ上げると、洪作には何の言葉もかけず、再び海へはいって、飛込台の方へ泳いで行った。

洪作は講習会の事務所のある近くの寺へ行った。雨でも降らない限り、めったに寺の境内へはいることはなかった。境内では大勢の少年たちがそここに屯して、みんな帰り

支度をしていた。

門のところで、この講習会の監督をしている国語教師の須藤が、

「お前、どこへ行ってた？」

と、不機嫌な顔をして言った。

「勝手にうろちょろしちゃあ、だめじゃないか」

洪作が簡単にわけを話すと、

「ふーん」

と、半信半疑の表情で聞いていたが、

「岡！」

と、五年生の岡の名を呼んだ。岡は居なかった。すると、岡の居ないことはさほど気に留めていない風で、

「とにかく、自由行動はいかんと、あれほど言ったじゃないか！」

洪作は額を小突かれて、二、三步よろめいた。ずいぶん割りの悪い話だったが、洪作は黙って引き退がるほかはなかった。

翌日も、洪作は静浦の水泳場へ出掛けて行ったが、いつもと違って、そこへ出掛けて行くのに張りがあった。昨日自分を救ってくれた三人の少年に会えるかと思うと、急に水泳の講習が明るく楽しいものに感じられた。自分な